

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2021年11月 NO.223



【もくじ】

- 2～3 米国での生活や仕事、経験について—NASAで過ごした研究の日々…伊藤元雄
- 4～5 このあと、本を読みませんか…山中由貴
- 6～7 旅が教えてくれたこと…イワシロアヤカ
- 8～9 想像を形にするおもしろさ…ハナカタマサキ
- 10 『竜とそばかすの姫』と高知フィルムコミッション…山口隆広
- 11 「アンテナ」うなぎの穴釣り…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団9月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

米国での生活や仕事、経験について

NASAで過ごした研究の日々

伊藤 元雄

最初の渡米は二〇〇一年で三十一歳でした。日本学術振興会の海外特別研究員制度に採用され、米国のアリゾナ大学の地球科学科で研究することになりました(図1)。

住むことは旅行とは違い、家を借り、銀行口座を開設し、電気や水道・電話などの契約、車の免許の取得など、旅行で通じたはずの英語は通用せず、生活に必要な全てを周囲の人にお世話になりながら過



図1 アリゾナ大学・地球科学科 (左から地球科学科のビル、実験室)

ごしました。日本では問題なくできることが、周囲の人々の助けがないとできないのかと痛感する日々でした。

所属した研究室は国際色豊かで、インド人が主宰、そのサポートを中国人、二名のイタリア人学生と私という構成でした。地球科学科全体をみても多様な国から来た留学生や研究者が多く働いていました。僕は少し離れた月惑星研究科にも分析や研究で訪れ、セミナーに参加しました。研究内容は、四十六億年前に太陽系で最初にできた鉱物中の元素に着目し、その元素の鉱物内での移動速度を求める実験的な研究を進めていました。だいたい一億年で一センチ動くかどうかという小さな物理定数をきっちり決めることで、小惑星の大きさや最高到達温度、形成年代に制約を与えるという内容でした。そのために、二カ月に一度、車で二時間のアリゾナ州立大学で分析を行うこともありました。当時は、

朝五時に家を出発し夜中の十二時ごろまで分析を続け、帰宅は二時を過ぎました。あの時は若く体力があつたなあと思います。

米国で運転免許を取得したためか、長い距離を運転することが大好きで、気分転換がてらグランドキャニオン国立公園をはじめ、アリゾナ州内の多くの国立公園を訪れました。慣れない環境に落ち込み、辛い時や研究・実験の考えをまとめる時は、サワロ国立公園のサボテンの前で、ただただ風景を眺めながら過ごしました。二年前に学会でアリゾナに戻った時も訪れ、アリゾナでの生活を思い出しました(図2)。そして、二〇〇四年末に一度帰国し、東京大学で研究を続けることになりました。



図2 サワロ国立公園のサボテン

二〇〇六年二月、今度はテキサス州のヒューストン市にある米国防空宇宙局ジョンソンズペーセンターの地球外物質研究部門(図3、以下「NASA」)において研究員として働くため、再び渡米しました。

なぜ僕がNASAで研究員として雇用されたのか。一つは、一つの研究テーマをじっくり続けていたこと、もう一つは、二次イオン質量分析装置(NanoSIMS/SIMS、図4)という希少な機器の取り扱いを死ぬ気で覚えたからです。研究は継続が大切です。地道に一つの事をやり遂げる姿勢が他の研究者から認められ、それがNASAでの研究へ繋がったのでしよう。ヒューストンでは、米国の機関が雇用主であることや、アリゾナでの経験があつたため、生活に関する苦労はあまりありませんでした。英語も最初は戸惑いましたが、仕事終わりに同僚と毎日のように飲みに行ったり、パーティーに誘



図3 NASA ジョンソンスペースセンター

われたり、研究室への来訪者対応など、以前よりも英語を使う環境になったことで、米国での生活リズムを習得していったのだと思います。しかし、NASAでの研究は、アリゾナ大学の時に以上怒涛の日々が続きました。引越しをすべく、彗星探査機「スターダスト」を持ち帰ってきた彗星の塵の同位体分析が開始され、休日返上で取り組むことになりました。一年以内にいくつもの彗星塵を分析して、科学的成果を創出するという任務がありました。誰しもが彗星から持ち帰った物質を見るのは初めてで、分析に非常に苦労しました。そもそも、どこに塵があるのか？どんな化学組成を持つのか？鉱物や有機物はどのくらいの比率で存在す

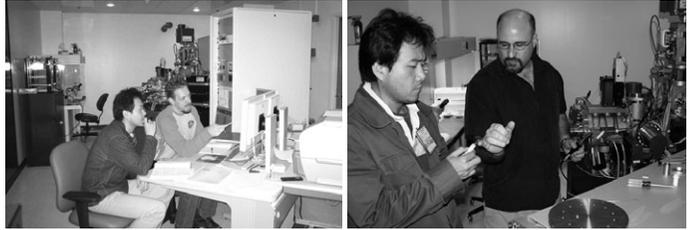


図4 NanoSIMSが設置してある研究室で昼夜分析を行っていました

るのか？など、全くわからないまま研究がスタートしました。最初に分析装置 (NanoSIMS) で分析を開始する時に測定対象の塵を探すだけでも八時間もかかったというをよく覚えています。その後も、分析、レポート書き、レポートをプロジェクトの首席研究者に送付、そしてチームメンバーで議論するということを、連日繰り返していました。スターダストプロジェクトでは六つのサブチームに分かれて詳細分析を進めていましたが、「同位体分析チーム」に参加した日本人は僕だけでしたので、苦労もありましたが、誇りを持って仕事をしていました。研究成果は、二〇〇六年十二月発刊のサイエンス誌に全七本の論文として纏められていますが、現在でもNASAをはじめとする世界中の研究者らにより分析が続けられています。このプロジェクトが一段落した後、多くの研究者らと共同研究を進めつつ、首席研究者としてNASA/Cosmochemistryという外部資金獲得のため奔走しました。この時は、ハワイ大学に赴きピーチを横目で見ながら、朝から夜まで共同研究者のオフィスに籠って申請書を書くための合宿をしました。一時間に一回はみんな顔

突き合わせて、申請書類の改善のためどう書くかを繰り返して議論しました。この時に申請書だけでなく、英語論文の書き方や見やすいプレゼン資料のつくり方なども学びました。その申請書が審査を通過し、三年間の人件費と研究費を獲得したのは嬉しいものでしたし、自分が首席研究者としてのプライドを持つことに繋がりました。その経験は、現在にも十分に活かされています。米国生活で、研究以外の衝撃を受けたのは、二〇〇一年に同時多発テロが起きた時です。この時は、大学もロックダウンされ、戦闘機が飛び交い、警察や軍が警戒網を敷くなど、買い物すらできない状況でした。インターネット回線が整備される前後だったので、情報が錯綜し不安な日々を過ごしました。また、ヒューストンにいた時は、巨大ハリケーンの襲来で、避難生活を余儀なくされました。米国での様々な経験は、僕の研究や生活に大きな影響を与えています。今でも米国の研究・生活環境に憧れもありますが、それは、米国の風土だからできるのであって、日本には日本人に合う研究システムがあり、その中で皆が進む必要があると思うようになりました。しかし、それを日本にいな

ら理解するのは難しいです。SNSなどが普及し、いろいろな情報に触れることが容易になった現在では、それらのみの情報から海外が良い、日本が悪いという人もいます。もちろん、海外生活の経験があったとしても、全てがわかるわけではありません。それでも、見える世界は変わってきます。国内外を問わず自分の力を試す機会があれば、是非とも挑戦し、違う価値観に触れる事は重要な事だと考えます。自分が経験したことや感じたこと全てを糧にできる、自身を磨く場所として海外生活を選択肢の一つとしてもらえればと思います。

いとう もとお

一九七〇年三月 愛知県名古屋生まれ。

学習院大学理学部化学科・博士課程修了

現職は国立研究開発法人海洋研究開発機構高知コア研究所・主任研究員

このあと、本を読みませんか

山中 由貴

本棚がばんばんでもう一冊だつて入らない。リビングのテーブルにはまだ読んでない「はやく読みたい本」、棚の上にはまだ読んでない「そのうち読みたい本」、寝室は床積みされた本のタワーが違法建築状態、レジ袋から出してもない本、買った覚えがない本……。

現実の本棚はもう收拾がつかなくて人に見せるのは完全にNGだし、読み返そうと思っても絶対見つからないし、何冊くらい本を持っているのかなんて数える気にもならないけれど、脳内にある「ほんとうに大事にとっておきたい本だけしか入れない本棚」は無尽蔵に収納できるし、整理整頓ができていく気がする。その想像上の本棚にしまう本は、厳選に厳選をかさねた、神（私）に選ばれし伝説

の書物なのじゃ……！と、全知全能感を愉しんでいる私が、言葉もなくひれ伏してしまった恋愛小説をあなたに紹介したい。

と、いつて恋愛小説が苦手だ。

性格が悪いからだろうか。胸キュンなんかしてやるか、恋の駆け引きやらうじうじ思い悩むのやらにつき合つてられない、よそでやってくれ、と思つてしまうのは。

じぶんが面白いと思つた本をツイッターなどでわりとオープンにしているの、出版社の人も私の読書傾向にあわせて、読んでみてほしい本を送ってくれることがある。これいい、売りたい！となればその作品を多く仕入れて売ることができるからだ。

恋愛小説など目にも留まつてな

いことがまるわかりなはずの私に、その文庫は送られてきた。中山可穂さんの『白い薔薇の淵まで』という、女性同士の恋愛を描いた小説だ。

恋愛もの、というだけでもどこかへ放つて忘れ去つてしまうのに、同性同士の色恋沙汰なんて、正直いつて避けて通るような部類の本だ。なぜまたこんな本をよりにもよつて私に……と首をひねつたけれど、添えてあつた編集者さんからの手紙に、思わず惹きつけられてしまった。

『白い薔薇の淵まで』が最初に刊行されたのは二十年前、二〇〇一年のことだ。その後、文庫版も出たが長らく絶版になってしまつていた。それを「絶対にこの作品を埋もれさせたくない」、「心の

底から、もう、とにかくものすごく傑作」だという思いで復刊させたのが、その編集者さん本人なのだ。

新装して刊行されたその本に巻かれた帯には、「一行も読み飛ばせない、完璧な恋愛小説」とある。ここまで言われて読みたくならない小説好きはいないと思う（みなさんいかがですか）。

NYの紀伊國屋書店でふと目に入った懐かしい名前。その本を執筆した女性作家は、かつて「わたし」が激しく溺れるような恋をした相手だった。

へえ、紀伊國屋書店つて、高知にはないくせにNYシティにはあるんだ？ふん……、などと要らぬことを思いながら読みはじめると、あとはもう、本を一度も閉じなかつた。腐れ縁でつき合つていた男との約束をすっぽかし、出会つたばかりの年下の新鋭作家に、女性同士の性の喜びをからだに刻まれる。わがままで劇薬物のような山野辺^{やまのべり}は、作家として著したデビュー作からスランプで書けなくなり、もがいている最中の、手負いの獣だった。

彼女との未知の恋に、平凡に生

きてきたOLの「わたし」ことクーチは、あつという間に飲み込まれ、別れようとしても離れられない、傷つけあっても求めずにいられない、不毛で救いのない泥沼に堕ちてゆくのだ。筋を書いてしまえばなんて陳腐な、とびつくりしてしまふ。

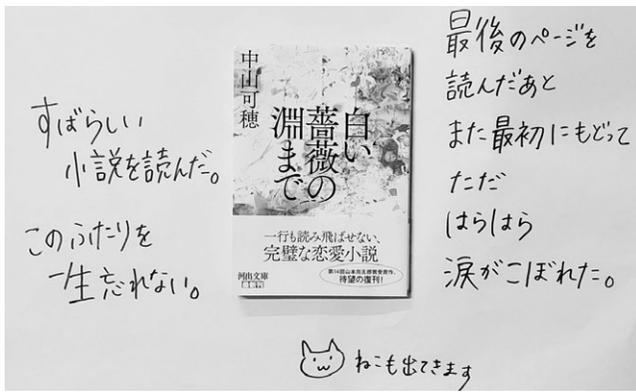
それが陳腐どころか唯一無二の、珠玉の小説になっていっているのだから、作者の筆の力が恐ろしい。

女性同士、男性同士の性愛を描く作品は、いまの時代もうけして珍しいものではない。そうとは知らずに本や映画やドラマで出合っても、違和感を覚えることもなくなった。それでも、あらかじめその作品がじぶんの性的趣向と異なるものだとわかっていたら、なんとなく距離をとってしまう、私はそんな選択をしてきた。

もしかしたらこれは性差別にあたるのかもしれない。どんな境遇の恋人同士がいたっていいじゃない、と思っただけじゃあなぜ、そういう創作物を避けるんだろう。私は、彼女たちを相容れない感覚の人たちだと考えているんだろうか。これほどはつきりとした女性同士の恋愛を

読みながら、そんな考えが頭のなかでぐるぐるしはじめた。

作中、累とクーチが肉体的に愛を交わすシーンも幾度となく描かれる。そういう箇所に入ると、じぶんは今これをどう受けとめているのかな、と立ちどまる。でもふしぎなことに、これほどまですも心も相手に委ねられるって素敵だな、ただ彼女たちを覗き見していることだけが、申し訳ないような、悪いことをしているような気持ちになってしまふんだなとストンと腑に落ちた。べつに同



性同士であることを見たくないわけじゃないんだ。それほど彼女たちはごく自然に、からだを含めた親密な関係を読者に認めさせてしまふのだ。そこには、好きになつて、体温を感じて、許したり許されたりすることがどんなに日常的なことか、そしてどんなに尊厳の間であるか、それだけが異様なまでの切実さをもって書かれている。

そしてなんととっても、よけいなものがそぎ落とされた、簡潔な文章が心地よく目に飛び込んでくる。累とクーチが傷をえぐって罵り合う場面でさえ、清々しく胸に突き刺さる。苦しくてやめてしまいたいのに、見入ってしまう。小説でしか表せない揺れ動きを、しつかりと掴んで書きとめている。作家が魂を込めてたつたひとつのことを突きつめると、こんな得もいわれぬ物語が生まれるのか、と本を閉じながらおののいた。

深く納得してしまつたのが、著者のあとがきだ。中山可穂さんはこう書いている。

「**気が狂うような美しい小説を書きたい。**」

まさに、まさに私は、彼女たち

の激しさを美しいと思ったのだ。歪な形の凹と凸がこれ以上なくらいぴつたりと嵌まつたときみたいに、この作品に完璧さを感じたのだった。

「ほんとうに大事にとっておきたい本だけしか入れない本棚」に、めずらしく恋愛小説が加わることになったのは、そんなわけなのだ。私のように、なんとなく躊躇しているひとへ。きっとこの作品は読む人をなぎ倒していくから、覚悟して。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員
なかましんぶん編集長として
Twitterをやっています

好きな本について喋るときだけ
饒舌になります

旅が教えてくれたこと

イワシロ アヤカ



〈旅との出会い〉

旅との出会いは十一年前、大学四年の秋のこと。行きつけのバーで、世界一周旅行から今しがた帰ってきたという男性の隣にたまたま座ったのがきっかけだ。そのころ星は好きだったけれど、別に詳しいわけでもなかった。何気なく「いちばん星が綺麗だった場所はどこですか？」と彼に質問した。「ボリビアのウユニ塩湖かな？星が地面にたまった雨水の鏡に映って、三六〇度星に包まれたようになるよ」―その言葉を聞いてから一カ月後。私はもう南米のウユニ塩湖にいた。

もともと行動が先に来るタイプ

の私である。水鏡の絶景として超有名なウユニ塩湖だけれど、勢いでボリビアへ来た私は無知だった。十一月、ボリビアは乾季でかの有名な水鏡は現れない。現地のガイドに「今の時期来るやついないよ！」と呆れられながらウユニツアーに参加。やつちやつたなあ：とがっかりしたもの、せっかくな来ちゃったし星見て帰ろう！と塩湖のど真ん中のホテルに泊まることにした。

夜、シーズンオフの塩湖に他の泊り客は誰もいない。暗くなるにつれだんだん怖くなってきた。灯りもない。風の音しかしない。夜が来ると、まるで地球上にたつた

一人放り出されたように感じた。でも、星だけは見て帰らなければ。怖さを押し殺すように、乾いた塩の大地に背中を必死に押し付けた。「……！」

恐る恐る目を開けてみたものは、目の前数センチのところを迫るような満天の星だ。そのまましばらく金縛りのように動けず、宇宙へ落っこちそうな感覚におそわれて、手の爪をたてて地面をつかむ。多分、五分も持たなかった。早々に部屋に引き上げて毛布をかぶった。でも、私の中に燃え出した炎は、消えるどころかどんどん大きくなっていった。

それは、知らない場所へどんどん

ん私を誘いだす、「好奇心」の炎だ。そしてそのとき、いつか絶対バックパッカー旅で世界一周しようと思ひそかに決心した。

〈再び旅へ〉

ボリビアへの旅から五年。お金も貯めた。今度は周到に準備もした。世界一周へ旅立つ時が来たのだ。一年をかけて、日本から西回りに世界を一周することにした。

インドを訪れた時のこと。日本人観光客の私の目には、何もかも



キルギス・ソングル湖のほとり、月明かりに浮かぶユルタのシルエット

が珍しく魅力的に映った。インドには物乞いをして生きている人もいる。「喜捨」の精神が根付き、富める者は貧しい者に施す習慣があるのだ。

同じ宿に泊まっていた日本人何人かで街を歩いた時のこと。一緒に歩いてた日本人の男の子が、物乞いの男性に何かくれと話しかけられた。日本人の彼は何気なく、逆に何かくれ、と物乞いの男性に手を差し出した。すると、物乞いの男性はコインを手に握らせてくれたのだ。まさかの、逆パターン……！

物乞いの男性がどんな状況で、どんな気持ちだったのか真実は分からない。でも、私にとっては十分衝撃的だった。物乞いに対する自分の思い込みにショックを受けたと同時に、もつと訪れた国の文化や習慣をちゃんと知りたい、と強く思わされた出来事だった。

中央アジア・キルギスには、遊牧民が使うユルタという移動式住居がある。私は、湖のそばでそのユルタに泊まれるツアーに参加した。草原のトイレは、数軒のユル

タの立ち並ぶエリアから少し離れたところにある。便器を囲っただけの小さな四角い小屋の中にある、しゃがんで用を足すタイプのため込み式のトイレだ。

夜、私はトイレに行きたくなかった。でも最悪だ。昼間何とも思わず使っていたトイレだが、そういえば電気なんかなかった。私にはスマホのライトしかない（用を足すとき持っていられない！）。真っ暗なためこみ式トイレ。色んな意味で怖い。しかしとうとう我慢で



インド・ケーララ州にて。バックパックを背負って歩く筆者

きなくなり、意を決してユルタの外へ出た。するとどうだろう、真っ暗なはずの草原が白い光を放っている。空には満月近い月が昇り、辺りを煌々と照らしていたのだった。かつて、こんなにも月をありがたいと思ったことがあっただろうか。こんなに明るいなんて知る由もなかった。人工の光にかき消された月明かりしか見てこなかったからだ。私はトイレのドアを開けたまま、月の光に照らされながら無事用を足したのだった。

〈世界が広がるということ〉

結局体調を崩し、世界一周の旅は四カ月のアジア横断に終わったのだが、知りえなかった場所、触れることのなかった文化、想像を超えた自然、そしてそこに生きる人々との出会いが、私の世界を大きく広げてくれた。

何かを「知る」「体験する」ところがそのきっかけになる。それは誰にも奪うことのできない財産であり、枯渇することのない燃料のように、「好奇心」の炎を燃やし続けてくれる。好奇心が次に生む

のは「？」だ。身近なところにある「？」がどんどん見えてくる。

なんで、お腹が空くんだろう。なんで、学校に行くんだろう。なんで、私は生きてるんだろう。

なんで、なんで…？そしてまた、「知る」「体験する」。「？」を問いつける。気づいて、考えて、実行することを繰り返す。

世界を広げるといことは、こうして生きるチカラというものになっていくんだと私は考えている。

旅はまだ続いている。

いわしろ あやか

一九八八年 愛媛県今治市生まれ。
sorashiro という屋号で起業し、星空体験を通して「世界が広がる感覚」を伝えている。

想像を形にするおもむき

ハナカタ マサキ

はじめまして。ハナカタマサキです。佐川町出身の妻との結婚を機に二〇一五年に埼玉の川口から佐川町に移住してきました。

勤務先の会社の社長に高知へ移住する話を伝えると「インターネッ트가つながれば在宅勤務で続けてみないか」と提案してくれました。今では当たり前となったテレワークですが、佐川町の妻の実家で在宅勤務をスタートすることとなりました。高知に行って仕事が見つかると不安だったので社長の提案には本当に感謝しています。勤務以外の時間はひたすら音楽制作にあててきました。当時は高知に行ったら自分の音楽人生はどう

なるのだろうかという心配がありました。したが、結果として今たのしい音楽生活を送れています。

僕の音楽制作のスタイルはほぼ全ての工程をひとりで行います。作詞、作曲、アレンジ、すべての楽器の演奏、録音、編集などひとりで行るので、あつと言う間に時間が過ぎてしまいます。こだわらうとすると際限なくできてしまう環境なのでついめり込んでしまいがち。気がつけば一日中作業をしています。ミュージック・ビデオの映像制作も好きで自分で手がけます。頭の中の想像を形にしていくながためたのしいのです。二十年前に当時やっていたバン

ドで、レコーディングスタジオを借りて録音する機会に何度か恵まれましたが、レコーディングスタジオはレンタル料がとても高く当然時間に制約があります。いつも満足いくものが録れないまま作品化されてしまい、いつかは自分の部屋にレコーディング機材を導入して贅沢に時間を使って作品をつくりたいという思いがありました。

自分は録音物や作品に対して、どうしてこんなに執着しているのだろうと考えると、その当時のことを思い出します。

そして十年前にバンドが解散してしまっただけで、すべての工程を一人で行うという今

のDIYスタイルになりました。バンド形態で作品制作をするとうしても周りに気を使ってしまっ、なかなか意見を言えない自分の性格を考えると、このDIYスタイルはとて性に合っていると感じます。また、ひとりで全て行うと早くゴールに辿り着けるんだなということも感じました。

僕がつくる音楽はいわゆるふつうの楽器編成ではなく、楽器・非楽器問わずいろんな音が鳴っています。普段から音の出るものなんでも鳴らしてみても面白そうだっ





たら録音します。それらの音がきつかけで曲ができることもめずらしくありません。セロハンテープ、水、ノコギリ、タッカー、風呂桶、ふりかけ、トランプ、ハサミなど、叩いたり振ったり引つ張ったりして音が出そうなものはなんでも鳴らしてみます。そして録音します。自分の胸にマイクを当てて心臓の音を録音して、それをコンピュータでリズムを分解して編集して使ったこともあります。また、

楽器を収集する癖もあって、今では押し入れまでいっぱいになってしまふほど部屋が楽器であふれています。アルバムを一枚制作するにあたって、だいたい五十種類くらいの楽器を使用しています。とにかく作曲することが大好きで、発表していかないけど形になっている曲が膨大にあるのでいつかきつかけをつくって世に出したいです。今は新アルバムを制作中で毎日こつこつと音を録り溜めています（二〇二二年の夏か秋にはリリースしたいと考えています）。時間を使いたいだけ使える環境にいるので細部までとことんこだわってしまいますが、細部が良くなくていい音楽はありません。どんなビッドログクだって、いい音楽は飴細工のようにつくられています。即効的な享楽や人々への過剰な煽動がこれまで以上に求められる今日のポップ・ミュージックの世界、手軽で便利に音楽をつくれる時代になったからこそ手間暇かけて面倒な手法で音楽をつくりたいです。これらの音楽制作のほか、自身の活動のマネジメントや自主レー

ベル「PENTACOAST」も主宰しています。なんでもやります。最初は「ごっこ」で始めた自主レーベルですが、小さく徐々にスケールするようになり充実感もあります。今年になって制作やライブなどで、これまでになく忙しくなってきたにいいよ一人では手が回らなくなってきたと感じることが何度かありました。これまではいろいろ一人で完結してきましたが、自分のことを理解してくれて発信活動を手伝ってくれる仲間がいてくれたらいいなと考えるようになりました。誰か手伝ってくれる人がいないかな。「早く行きたければ、一人で行け。遠くまで行きたければ、みんなで行け」という言葉があります。もう少し遠くまで行ってみたいです。

こんな風にほぼ毎日部屋にこもって音楽制作をする時間を過ごしています。いつも支えてくれてる妻にとっても感謝しています。音楽をつくるときに健康な精神状態でいることはとても重要なのです。高知に連れてきてくれてありがとう。レコーディングルームか

ら見えるのどかな斗賀野の山々も贅沢なロケーションだと感じるようになってきました。

これから先どんな人生が待っているんだろう。たぶん何があっても音楽をつくって生活をしているとは思いますが。その音楽が誰かの耳に届いて、すこしでも響いてくれたら幸せです。

はなかた まさき

一九七九年一月二十三日 東京都立川市生まれ。

楽器・非楽器問わず無数の鳴り物をつかって作品をつくる音楽家。楽曲の全てを作詞・作曲、演奏、アレンジ、レコーディング、ミキシングまでひとりで手掛ける。

<https://masakihanakata.com/>

『竜とそばかすの姫』と 高知フィルムコミッション

山口 隆広

高知県観光コンベンション協会には高知フィルムコミッション（高知FC）という業務があります。一言で言うと「テレビや映画などの撮影に関する相談を受ける窓口」です。撮影チームの宿泊や飲食、テレビやCMで流れたときの宣伝といった直接的・間接的な経済効果を期待しています。電話やメールで回答するだけで十分な場合もあれば、ロケハン・撮影に数日間つきつきりになる場合もあります。

二〇一九年九月、人気アニメ『サマーウォーズ』や『おおかみこどもの雨と雪』の細田守監督の所属するスタジオ地図から、「高知にロケハンに行くので協力してもらえないか」と連絡がありました。当時はまだタイトルも何もな

かったのですが、いの町観光協会や仁淀ブルー観光協議会と協力して、高知にやってきた細田守監督らを案内しました。それから約二年、二〇二一年夏に公開された映画『竜とそばかすの姫』となりました。

二〇二〇年の春に再度連絡をいただいた頃はコロナウイルス問題が深刻化していて、高知に来ることが難しくなっていました。「浅尾沈下橋の朝の様子を知りたい」とのことでした。現地の音や陽光の変化を押さえることが大事だろうと、写真だけでなく動画も撮って送りました。

ほどなく、「鏡川の夕景を見た」との連絡がありました。細田守監督の『時をかける少女』では荒川（東京都）の様子や夕景が丁

寧にとても綺麗に描かれていたの
で、これは重要と考え、その日から十日間ほど毎日写真と動画を撮って送りました。日によって時間によっても、雲の量も形も、風と潮の満ち引きで川面の様子も違うので、一、二回撮ってハイ終わりでは絵を描く側には何の役にも立たないと考えたからです。オンライン会議アプリを活用してスマホやタブレットを複数台使用しました。このリモートによるロケハンは、池信孝美術監督が「初めての経験」と高知新聞の取材に語っていました。仕組みは単純ですが、先進的な取り組みをしていたのだと思います。

デザインや映像を、デジタルとネットワークを駆使して海外と連携して作品を作っているのが『竜とそばかすの姫』の大きな特徴の一つですが、その意味でも、高知FCは、とても小さいながらも、その一部を構成していたのだと思います。

その後も、沈下橋の周囲の植生、酒屋に並べる土佐酒銘柄、ふれあいの里柳野の様子等々、依頼があったことは徹底的にやりました。

新聞や雑誌・テレビ等のインタビューで細田守監督や池信孝美術監督が「高知FCに撮影を何度も何度も日を変えて、かなり細かくやっても良かった。本当にありがたかった」「おかげであんばいはい夕方の方の「顔」を作り出すことができた」といったことを仰ってください。高知FCの本懐と言えるのではないだろうか。

『竜とそばかすの姫』が一過性の作品でない、長く残る作品となるのではと期待しています。そうならば、それが高知FCの果たした役割の真価だと思います。



アップした
PR動画は
こちらから
タイアップ
と観光
映画と高知

やまぐち たかひろ

一九七〇年兵庫県明石市生まれ。
（本籍高知県）

高知県観光コンベンション協会職員
<https://www.atakao.jp/>

「アンテナ」 うなぎの穴釣り

下尾 仁



周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。

高知市内で小さな喫茶店を営んでいるのだが、店ではよくユーチューブをテレビで見ている。特に釣りに関するものを見るのだが、ユーチューブは次から次へと関連動画が出てくる。そして僕が最もハマったのがうなぎの穴釣り動画である。

だいたいがミミズなどのエサを針につけ、一メートル弱程の棒の先に引っかけ、川に転がっている石の下や堤防にできた穴に挿し入れしていく。うなぎがいればエサを穴の奥へググッと引つ張っていくので、それに合わせ糸を引つ張ると、ゆにゆくとうなぎが現れる。ユーチューブではいつも簡単に釣りあげるので、自分もやってみたくてしまった。

うなぎは高級なので久しく食べていない。ぜひ、自分で釣って食べたい。その話をフィギュアイラストレーターのデハラユキノリ氏

にすると一緒にやってみたくらいのこと。

日程を合わせ、いざ出陣。店から歩いて二、三分程の金谷川に行ってみた。この川に本当にうなぎはいるのか半信半疑だったが、ユーチューブで見たとおり棒の先についたエサを穴に挿し入れてみる。二箇所目の穴にエサを入れた途端グググッとエサが穴の奥に持つていかれた。糸を引き寄せるとうなぎが顔を出した。興奮のあまり「うひょーいるぞー」と雄叫びを上げてしまった。が、針の掛りがあまかったのかバラしてしまった。でもこの川にうなぎはいる。するとすぐにデハラ氏が「釣れたー」と声を上げた。釣り上げられた大きなうなぎはうねうねと体をくねらせていたが、またしても掛りが浅かったのか、ポタッと音をたて川に落ちスイスイとどっかに泳いでいってしまった。

逃した獲物は大きかった。だが釣りはじめて十分もたっていないのに二匹のうなぎを見た。もう釣れる気がしない。するとまたまた

たエサが穴の奥に引きこまれた。糸を引つ張ると、デカイうなぎが顔を出した。しかしうなぎもすごい力で引つ張る。こっちも負けじと引つ張る。うなぎとの綱引き状態だ。サーウン、サーウン、力を入れ過ぎたのか針がピンとはずれ、またしても逃がしてしまった。

なかなか釣り上げるのは難しい。すると上の方から何をしているんですかと声を掛けられた。通りがかりの人が気になったみたいだ。たしかに大の大人が川をドブリながら大はしゃぎをしている。気になるのもしゃががない。変に思われるのもなんなんで素直にうなぎ釣りをしますと答えた。こんな川にうなぎがいるんですか？と聞きかえされた。僕も二十分前までは、半信半疑だったんですが、残念ながらまだ釣れてないですが。と答えた。するとデハラ氏がどうだと言わんばかりに「釣れたー」と釣り糸にうなぎをぶらさげている。でもまだ安心はできない。水を入れたクーラーボックスのふたを開け、クーラーの中にうなぎを入れ、ふたを閉めた。ついに釣り上げた。上から声を掛けた人は一部始終を見ていた。すごい釣れましたね。いい物を見させていたいただきましたと去って行った。デハラ氏と僕はついにやっただと満面の笑みを浮かべた。それからしばらく釣り、合計三匹釣り上げ、一匹は小さかったのでリリ

ース、二匹をいただくことにした。あとで思ったのだが、さばくところもユーチューブで確認しておけばよかった。適当にさばいたので、さっきまで川にいた天然うなぎはグチャグチャにさばかれ残念なうなぎになってしまった。

どんな味かと口の中に入れてみる。うまい!! うなぎがグイグイとエサを引つ張るように、僕の口の中にグイグイとうなぎが入ってくる。デハラ氏もうまいうまいと食べている。こんな近くの川に、こんなにもうまい物がいたなんて、それからしばらく僕は穴釣りにハマってしまい店のオープン前にうなぎ釣りに勤しんだ。

本当に子どもに戻ったみたいに楽しいんです。実はこの状況をユーチューブにアップしています。もし興味のある方は『年頃TV』で検索してみてください。そしてチャンネル登録してくれたら感謝です。



しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

9月の事業から

「Le Fils 息子」高知公演

舞台「Le Fils 息子」は、フランス人の劇作家、フロリアン・ゼレールによって書かれた作品です。「父」「母」「息子」と、フロリアン・ゼレールが作った家族三部作の一つで、「父」は、「Le Père 父」というタイトルで、二〇一九年三月に橋爪功、若村麻由美らの出演によりかるぼとで上演しました。

その後、フロリアン・ゼレールは、映画「ファーザー」で二〇二二年第九十三回アカデミー賞脚色賞を受賞し、本作「Le Fils 息子」への期待が高まりました。本作は、ジャーニーズ事務所所属俳優の岡本圭人と岡本健一という実の親子が、親子役を演じるということでも話題を集めました。初共演で親子役、しかも脚本内容がお二人の人生と重なる部分もあり、岡本健一が「血の繋がった父と息子が織りなす、ある家族の物語の生活を、劇場にて公然と覗き見て下さい」とインタビューに答えていました。

舞台は、八月三十日の東京公演を皮切

りに、北九州↓高知↓能登↓新潟↓宮崎↓松本↓兵庫と全国八都市を回るツアーとなり、高知では、九月二十二日と二十三日に二回公演を行いました。

二回公演とも四百名弱のお客様にお越しいただきました。岡本親子のファンと思われる若いお客様も多く見受けられました。また、県外からのお客様も大変多くご来場いただきました。

物語は、主人公が両親の離婚から心を痛め、必死に生きていこうとするさまを描いていますが、主人公だけでなく、周りの家族も心を痛めるような苦しさがあり、実に表われていました。初主演となった息子役の岡本圭人は、公演前の七月にプロモーション活動で高知入りするなど、本公演に懸ける意気込みが強く感じられ、本番前や本番中の集中力も凄まじいものがありました。九月二十二日の終演後は、楽屋で出演者全員が長く語り合う姿も見られ、ツアーを通じて深まっていく仲の良さが垣間見えました。

終演後は、会場内の観客の拍手が鳴りやまず、四回のスタンディングオベーション。場内が明るくなり、しばらく席から動けなかった人、涙ながらに帰る人、観る人に多くのことを考えさせる二時間でした。決してハッピーエンドでは終わらず、切ない気持ちに心に残る作品ではありました。ただ、この作品に出合えた多くの人が、内なる自分と向き合えたり、大切な家族や友人を思ったりしながら、心の中に優しさの実を一つ蓄えることができたと思います。

本公演開催前には、高知県に初めてまん延防止等重点措置が適用され、開催が危ぶまれてはいましたが、キャスト・スタッフ・職員、皆事前にPCR検査を行い、ホール内では役割ごとに動線を分け、行動範囲を限定することで、互いが接触する機会を極力減らし、感染対策を十分に行った上で催行しましたことを報告いたします。

〈入場者数 二日間合計七百四十三名〉

高知市文化振興事業団

第一九五回

市民映画会

九月十七日（金）にかるぽーと大ホールで第一九五回市民映画会を開催しました。

市民映画会は、高知で未公開の文化の薫り高い劇映画を低廉で提供することを目的に、一九五一年より開催しています。

今回は、「秘密への招待状」と「シラノ・ド・ベルジュラックに会いたい！」の二作品を上映しました。

「秘密への招待状」は一つの「秘密」が明かされるとまた次の「秘密」がでてくる、ミステリーのような話の進行に目が離せないヒューマンドラマでした。運命とは何か、偶然とは何かを考えさせられる作品で、飽きさせない展開と相まって、あっという間の二時間を過ごせたのではないのでしょうか。含みのあるラストシーンも印象的でした。

「シラノ・ド・ベルジュラックに会いたい！」は実在する戯曲の誕生秘話です。登場人物一人ひとりの個性が際立つ作品で、魅力のあるキャラクターに引き込まれていき、『シラノ・ド・ベルジュラック』

を知らなくても楽しめる映画でした。作品を知っている人と知らない人で感想も分かれる作品で、映画を見た後の余韻も人それぞれ。市民映画会に相応しい作品だったと思います。

今回初めて一日だけの上映会でしたが、パンフレットも完売するほどの好評でした。

次回は、来年一月二十一日（金）に開催します。第二次世界大戦時にユダヤ人孤児を救ったアーティストの実話「沈黙のレジスタンス」とイストラエル・ナザレ出身の映画監督が描くブラックコメディ「天国にちがいない」の二作品です。お楽しみに。
〈入場者数 百九十七名〉

高知街

ラ・ラ・ラ音楽祭 2021

九月十九日（日）に中央公園など四会場で開催を予定していた高知街ラ・ラ・ラ音楽祭をWEBラ・ラ・ラとして公式ホームページで実施しています。現地で開催するよう準備を進めていたなか、高知県発表の新型コロナウイルス感染症対応のステージが「非常事態」に引き上げられ、開催方法を変更したためです。他のフェスと違い、ラ・ラ・ラ音楽祭は

「音楽のちからで街を元気に！」というコンセプトで、中心市街地の公園やオーテピアの広場といった開放的な空間を会場



にしています。街を歩くだけで音楽を楽しむことができるお祭りだからこそ、ステージ前の客席だけでなく、公園内の通路など離れたところで音楽を楽しむ方への対応や公園内の区分けなど、業者の方の知恵も借りながら、特に時間をかけて議論を行っていました。

開催方法の変更後も、来年こそは三年続けてWEB開催とならないよう、参考としていた全国規模のフェスの実施状況や感染症対策を追って、情報収集を続けています。

ぜひ、今年のWEBラ・ラ・ラで来年に生で聴きたいバンドや好みのバンドを探してみてください。



“WEB”ラ・ラ・ラ音楽祭 2021
<https://kc-lalala.com/web-lalala-2021/>



高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

帯屋町にあった東宝

(平成16年5月14日 帯屋町1丁目9-4)

酒井 良昌

市内にたくさんの映画館があったが、今は愛宕劇場だけになった。

子ども時代に好きだった本を図書館で探しては読み返すのが楽しみになっている。

最近、ある児童書のシリーズで大判の『ロビンソン・クルーソー』を見つけた。読んでみて驚いた。ロビンソンがなかなか漂流しないのである。〃無人島の話、とは違う冒険談が延々と語られる。しかも面白い。

親にそむいて船乗りになったロビンソンは、海賊に捕らえられ奴隷としてムーア人に売り渡される。主人には気に入られるのだが二年後に脱出。ブラジルに渡り四年間農園を営む。だが、再び船乗りになって嵐に遭遇。漂流して、やっとあの無人島の生活が始まる。

この長い前話に、どんな意味があるのだろうか。ロビンソンは父親の教えと格闘していたのではないかと思われる。世界を放浪したいと言うロビンソンに父親は言う。「うちの家は中流階級だ。これは世の中で一番幸せな階級だ。下層階級は食糧のために骨身を削る。上層階級は出世競争に憂き身をやつす。この家にいれば、この上なく安定した生活が得られるぞ。それが本当の人生の幸

ロビンソン・クルーソーと三百匹の狼



風俗歳時記

予想外だった。イギリスに帰ったロビンソンは、ピレネー山脈で三百匹(一)の狼に襲われる。ドキドキする場面だが、これは大人向けには翻訳のない『続ロビンソンクルーソー』中の逸話らしい。

その冒険も終わり、ロビンソンが再び海に出るところで物語は終わる。――児童書を読み返すと発見するところは多い。

(本の虫)

せだ。馬鹿な考えは捨てなさい」この教えには、十七世紀の勃興するイギリス中産階級の誇りが感じられる。と同時に頑固な保守性も。格差社会の中で中流層の衰退が危惧されている現代日本にとっても示唆が深い言葉だ。

ところがロビンソンは父の教えに得心しつつも反発する。その葛藤が、前話の『冒険』と、安定した生活の反復に現れている。この問題に決着がつくのが無人島での二十八年の生活だ。父の教えは正しい。けれど、無人島の冒険生活の中にも幸せはつくり出せる。こういう生き方もある、とロビンソンは言いたいのである。

物語の終わり方も

親にそむいて船乗りになったロビンソンは、海賊に捕らえられ奴隷としてムーア人に売り渡される。主人には気に入られるのだが二年後に脱出。ブラジルに渡り四年間農園を営む。だが、再び船乗りになって嵐に遭遇。漂流して、やっとあの無人島の生活が始まる。

予想外だった。イギリスに帰ったロビンソンは、ピレネー山脈で三百匹(一)の狼に襲われる。ドキドキする場面だが、これは大人向けには翻訳のない『続ロビンソンクルーソー』中の逸話らしい。

その冒険も終わり、ロビンソンが再び海に出るところで物語は終わる。――児童書を読み返すと発見するところは多い。

(本の虫)

同時上演『夏の名残のバラ』*井関佐和子 芸術選奨文部科学大臣賞受賞記念

境 界

日 時 2022年1月10日(月・祝) 開場 15:30 開演 16:00
 会 場 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
 入場料 全席自由 前売り/一般 3,000円 高校生以下 1,500円
 当日/一般 3,500円 高校生以下 2,000円
 ※未就学児入場不可 ☆本公演はディスタンス席(50%)で販売します。
 助 成 文化庁(大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業)
 製 作 りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館
 主 催 公益財団法人高知市文化振興事業団、高知県立美術館
 公益社団法人全国公立文化施設協会
 高知新聞社、RKC高知放送
 お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

12月5日

①11:00-12:00

②14:00-15:00



The SHOW

【会 場】
 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
 【チケット】
 全席自由
 前売り 一般 3,000円
 高校生以下 1,000円

※当日はそれぞれ+500円
 ※Culチャーズ割引・特典あります。
 ※チケットをお持ちの各種身体障害者手帳所持者に介助が必要な場合、介助者1名は無料でご入場いただけます。

ワークショップ

12月4日

参加無料

16:00-17:00

※5日の観覧チケットをお持ちの方に
 限ります。
 ※チケットをお持ちの各種身体障害者手帳
 所持者にお申し込みの際にお申し出ください。

【主 催】
 公益財団法人高知市文化振興事業団
 【共 催】
 高工ミュージアム
 【お申し込み・お問い合わせ】
 高知市文化振興事業団
 TEL:088-883-5071

風 伯

「密かに殺されない ために」

インターネットが普及する前までは、「百万人の人々を誘導するのは、百万人の人を殺すよりも簡単なことだった」が、現在は「百万人を誘導するよりも、百万人を殺すほうが限りなく簡単」なんだと、カーター大統領の補佐官だったスビグネフ・ブレジンスキーが十年以上前に演説している。たとえば、いまだにその影響下にあるGHQの日本人の洗脳計画は、当時

仮に、体調不良が続いているとして、その原因はなかなか分かりづらい。知らず知らずの内に、じわじわと身体を侵食して死んでいく。自分の身体の不調が、たとえば食べ物であるか、あるいは、調剤試していくと原因が突き止められるかも知れない。それは精製塩であるかも知れない。グラニュー糖やサラサラ油、食品添加物であるかも知れない。大国の工場で私たちが使用させられているものかも知れない。その原因を突き止められるかどうかは、本人の探求する意思にかかっているし、今はその意思さえあれば真実を突き詰められる時代でもある。

さまざまな予防接種は本来に必要なのか。抗がん剤治療は本来に治療になっているのか。私たちの口にしているものは本当に安全なのか。当たり前と思われていることも、疑ってかかれば、知らなければ嫌な時代である。こんな時代に生きていくためには、知ることができ、命を誰とも分らない人間に握られることにならない。

(霖)

今号の表紙

「何気ない日常」

吉良 遥菜

今、世の中はとても大変な状況。だけどカエルたちはいつもと変わらない日常を送り続けている。そんな何気ない様子を一枚の写真に写しました。私たちも早く今までと変わらない何気ない日常を送れますように。

(きら はるな/
 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

Urban Saxophone Quartet Concert

アーバンサクソフォンカルテットコンサート



2013年に個性豊かな4人で結成したアーバンサクソフォンカルテット。音楽を身近に。をテーマに、たくさんのアイデア、幅広い演出で多くの人を魅了し続ける。第20回ブルックハルト国際音楽コンクールで部門最高位である室内楽部門審査員賞、第18回大阪国際音楽コンクールアンサンブル部門第2位（1位該当者なし）他、数々の賞を受賞している。2019年、Studio N.A.T.より、1stアルバム「meet」をリリース。4人の奏でる音に包まれて、より深い音楽体験をお届けする。

令和3年度 公共ホール音楽活性化支援事業

2021年12月18日(土)



高知市文化プラザかるぼーと
【大ホール】 開場 13:00 開演 14:00

全席自由
未就学児
入場無料

一般	前売り / 1,000円	当日 / 1,200円
高校生以下	前売り / 500円	当日 / 600円

Program

「フィガロの結婚」より「序曲」 / W.A. モーツァルト
 「ベルガマスク組曲」より「月の光」 / C. ドビュッシー
 サクソフォン四重奏曲 / A. デザンクロ
 ムーン・リバー / H. マンシーニ (編曲: 山田純子)
 ミシェル・ルグラン・メドレー / M. ルグラン (編曲: 山田純子) 他

◆お問い合わせ◆ 公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071 ◆ <http://www.kfca.jp/kikaku> ◆

【来場の皆様へお願い】

新型コロナウイルス感染症予防策として、本公演来場時は、マスクの着用、入口での手指の消毒、非接触式体温計による検温、連絡先の提供等にご協力いただきますようお願い申し上げます。